

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K11775

研究課題名（和文）「同志性」からみたベトナム・中国関係の変容と展望に関する研究

研究課題名（英文）Vietnam - China Comradeship: Its Historical Change and Prospect for the Future

研究代表者

栗原 浩英 (Kurihara, Hirohide)

東京外国語大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：30195557

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：中越両国指導者間の個人的な友人関係を基盤としていた「同志・兄弟」関係は、当事者の死去によって1970年代後半に終焉を迎えたが、1991年の両国関係正常化以降、両国間の歴史的な友好関係を象徴する語として首脳間で再び言及されるようになり、特に2013年の習近平指導部成立以降、この語の援用により両国間の一体性強化を図ろうとする中国側と、そこから距離を置こうとするベトナム側の姿勢の差が顕著になってきている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ベトナムと中国の関係は、両国間で対立や衝突が発生すると注目されるが、それ以外の平時の関係はあまり注目されることがないといえる。学術研究も個別のトピックに特化したものが多く、両国関係を長期的な視点に立って考察した研究も1960年代以降皆無である。本研究は「同志・兄弟」という語に着目して、比較的長期にわたる両国関係を分析した結果、平時にみえるような時期であっても、両国間で絶えず駆け引きが続いていることを明らかにした点で意義があった。その中で、ベトナムが中国との対立を避けながらも、巧妙な戦術で中国から距離を保っている点は、日本の対中外交にとっても示唆に富むものであるといえよう。

研究成果の概要（英文）：The “comrades plus brothers” relationship between China and Vietnam, which was based on the personal friendship of the communist leaders, ended in the late 1970s due to their passing away. Then, since the normalization of relations between the both countries in 1991, the younger leaders have come to refer to the word “comrades plus brothers” as a symbol of the historical friendship between both countries. Especially since the establishment of the Xi Jinping leadership in China, the difference of attitude to the use of the word has been getting apparent between the both sides: the Vietnamese side has been trying to limit the coverage of the word to the specific period of the past, whereas the Chinese side has been making an effort to strengthen the communist unity between the two countries under the name of “comrades plus brothers”.

研究分野：地域研究

キーワード：同志 共産党 ベトナム 中国 党・国家関係

### 1. 研究開始当初の背景

ホー・チ・ミンにより、1963年に発せられた「同志でもあり兄弟でもある」(以下「同志・兄弟」)という語は、ベトナム・中国間の歴史的な友好関係を象徴する語として定着している。このように、本来はベトナム・中国間の過去の一時期に限定して使用されるべき語であるが、中国ではベトナムに限らず、ソ連や北朝鮮など他の社会主義国との関係性を示す時にこの語が使用されることがあった。2013年に中国で習近平指導部が成立すると、現在の中国・ベトナム関係についても「同志・兄弟」関係を強調するようになったばかりでなく、南アフリカのような非社会主義国に対しても「同志・兄弟」関係を適用するようになった。こうした「同志・兄弟」関係の適用範囲拡大が何を意味するのかを明らかにすることは、直近の中国の対外戦略を把握する上で極めて有用であるといえよう。

### 2. 研究の目的

本研究は、ベトナムと中国がそれぞれ、「同志・兄弟」という語をどのように認識しているのか、すなわち両国間の「同志性」に着目しながら、比較的長期のスパンを視野に入れ、ベトナム・中国関係をとらえ直そうとするものである。「同志・兄弟」関係の具現である政治・経済・外交などの各面での両国の対応を明らかにすることにより、それが両国間にのみ特有な関係なのか、あるいは単なるネーミングの違いにすぎず、実質的には他の国々との二国間関係と大差ないものなのかを明らかにする。それを通じて、両国間には社会主義や体制の共通性を紐帯とした同盟関係構築の可能性があるのか、あるいは両国はそれぞれ別の方向に進もうとしているのかを展望することが可能となる。

### 3. 研究の方法

本研究においては、社会主義陣営の存在から消滅へという国際環境の変化に着目し、両国間で「同志・兄弟」関係を基盤とする「同志性」が相互に確認される時期を、第Ⅰ期(1950年代～70年代半)と第Ⅱ期(1991年～現在)に区分し、その連続面と非連続面に注意しながら考察を進める。

第Ⅰ期・第Ⅱ期いずれも、共同声明や公式な場での両国首脳の発言においては、イデオロギーや政治体制の近似性及び直面する課題の共通性が指摘されているにすぎず、「同志」が何を意味するのかという問題に関する具体的な説明はない。その点に関しては、両国の党文献や指導者の著作、党機関紙、文書館に収蔵されている史料等の精査による基礎的考察を通じて、「同志」という語が双方の高位の指導者や地方政府の幹部の間でどのようにイメージされていたのかを明らかにすることが可能である。

同時に、両国間の「同志性」の特殊性を抽出するために、ベトナム・中国二国間関係の分析にとどまらず、第三国との関係をも視野に入れた比較対照研究を行う。第Ⅰ期に関しては、ベトナムにとって中国と並ぶ最大の支援国でもあった社会主義国ソ連とベトナムの関係、さらには中ソ対立という状況の下での「同志性」の維持が可能となった要因について、中ソ関係も視野に入れながら考察する。第Ⅱ期に関しても同様に、中国が新たに「同志・兄弟」関係を適用しているキューバや南アフリカ等の国々と中国の関係にみられる「同志性」を、ベトナム・中国間のそれと比較対照を行う。考察にあたり依拠する資料は主として、ベトナム、中国、ロシア各国で公開された資料集及び文書館所蔵史料、新聞報道、動画などである。

その上で、第Ⅰ期と第Ⅱ期のベトナム・中国間の「同志性」の比較を通じて、とりわけ中国側が重視している第Ⅱ期の「同志性」が、第Ⅰ期の「同志性」への回帰をめざすものなのか、あるいはそれとは関連性のない新たな両国の同盟関係の構築をめざそうとするものなのかを明らかにする。それにより、近年の中国のグローバルな対外戦略の一端を占めるベトナムとの関係の近未来を展望することが可能となる。

### 4. 研究成果

(1) 第Ⅰ期の「同志・兄弟」関係は、ホー・チ・ミンと劉少奇、周恩来といったベトナム・中国両国共産党第一世代指導者間の個人的な交友を基盤とする固い信頼関係から成り立っていた。彼らは政権獲得のはるか前の1920年代から闘争経験を共有し、特に中国語や中国文化に精通したホー・チ・ミンの才能により、直接に意思疎通を図ることが可能だった。こうした関係は、ソ連をはじめ、同時期の他の社会主義国の指導者たちとの間には存在せず、その意味でベトナムと中国の間だけにみられる特殊なものであったといえる。しかしながら、このような特殊な関係が闘争経験すら共有したことの無い両国の次世代指導者に引き継がれるべくもなく、第一世代の指導者の死去によって1970年代後半に終焉を迎えることとなった。また、第Ⅱ期の二国間経済関係については、毎年輸出品と輸入品の量を取り決めて実行するという、市場メカニズムとかけ離れた形態で運営されていた点では、ベトナム・中国間も、ベトナム・ソ連間も共通していた。ただし、ベトナム・中国間では地理的近接性により、国家レベルでの貿

易と並行して、国境で隣接する地方政府間（広西チワン族自治区・広東省・雲南省・クアンニン・ランソン・カオバン・ハザン・ラオカイ・ライチャウ各省）でも同様に毎年取り決めの下に国境地帯で限定的な貿易が展開されていたのが大きな特色となっている。それも、相手方の不利益につながるような品目を輸出することは控えるといった相互の「思いやり」とでもいうべき、市場メカニズムとかけ離れた温情主義に支えられていた。貿易以外に、地方政府レベルでの中国からベトナムに対する各種援助供与も行われていた。いずれにせよ、こうした国境地帯における緊密な関係は、ベトナムとソ連との間には存在しないことはいうまでもない。

（２）第 期 of 「同志・兄弟」関係終焉後、両国は対立期を経て、1991 年に関係改善を果たした。本研究の規定する第 期の初頭にあつて、両国関係のあり方を示す語として、「同志」は残ったが、「兄弟」は姿を消すに至った。ただし、「同志・兄弟」という語自体は、歴史となった第 期の友好関係を回顧し、再確認するという文脈で引き続き使用されることとなった。しかし、2013 年に習近平が中国共産党総書記に就任して以降、ベトナム首脳との会談等の場で頻繁に「同志・兄弟」や「運命共同体」に言及し、両国間の共通性や一体感を強調するようになった。これは、最新の両国関係にまで「同志・兄弟」関係を適用しようとする可能性を排除できない点で、従前の用法とは明らかに異なるものであった。これに対して、ベトナム側は「同志・兄弟」という語の使用を、本研究の第 期、すなわち過去の一時期に限定したいとの立場を貫いたと思われる、ベトナム国内の報道でこの語が登場することはほとんどなく、両国の共同声明にも記載されることはなかった。ようやく 2022 年 11 月のベトナム共産党書記長グエン・フー・チョンの訪中に伴う共同声明において、「同志・兄弟」という語が明記されるに至ったが、それも過去について言及した一箇所のみとなっている。なお、「同志・兄弟」という語によって、中国側が何を意味しようとしているのかという問題に関しては、習近平の発言に基づくならば、社会主義国としての両国の共通性を強調するという一点に尽きるものと考えられる。他方、中国は社会主義国キューバとの関係においても、「同志・兄弟」関係を援用し、「相互に尊重し、平等に相対し、共に助け合う」ことであるとその内容を説明しており（2016 年）、社会主義とはあまり関連性のないものとなっている。その意味で、習近平指導部の援用する「同志・兄弟」には、一貫した内容があるものとは考えられない。

（３）以上に述べたように、中国はキューバとの関係においても「同志・兄弟」関係を援用してきたが、2016 年頃から中国側がそれを使用することはなくなり、「特殊な友好関係」あるいは「よき友人、よき同志、よき兄弟」といった表現にとって代わられることとなった。さらに 2022 年 11 月のキューバ大統領ミゲル・ディアス＝カネル訪中時の共同声明において、「新時代の中国・キューバ関係深化」の名の下に両国共通の課題として、「特殊な友好関係」のさらなる深化とともに、「人類運命共同体」の構成部分としての「中国・キューバ運命共同体」を共に建設することがあげられた。この点から、既存の「特殊な友好関係」に、新たに「中国・キューバ運命共同体」の建設という事業が追加されたことがわかる。

他方、2022 年 11 月のキューバ大統領の訪中に続いて行われたベトナム共産党書記長の訪中では、前述したように、「同志・兄弟」という語が初めて共同声明に明記される一方、キューバと異なり、「運命共同体」に関する言及はなかった。これはベトナム側が習近平指導部の主張する「運命共同体」論の受容に難色を示し続けてきた結果であると考えられる。ベトナムとしては、「運命共同体」の具体的な内容が不明である上に、そこに主権や領土が含まれていれば、中国との間に南シナ海問題を抱える以上、簡単には受け入れることはできないとの判断に立っていたものと思われる。ベトナムは 2023 年 12 月の習近平訪越に伴う共同声明において、ようやく両国関係を「運命共同体」へと格上げすることで同意するに至ったが、これはベトナムが中国側の圧力に屈したことを意味するものではない。それは、ベトナム語では「運命共同体」という表現ではなく、中国が英訳時に使用している「未来を共有する共同体」という表現を採用した事実から判断しうる。これにより、ベトナムは将来に向けて自己主張する余地を確保したともいえ、ベトナムが依然として中国側の主張に取り込まれないように慎重に対処していることの証左ともなっている。

（４）中国のグローバルな対外戦略において、ベトナムやキューバの事例が示すように、中国の当面の目標は多数の国々と「人類運命共同体」の構成部分としての「運命共同体」関係を構築することにあるといつてよい。ASEAN に限っても、程度に差はあるものの、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー、ベトナム各国は中国との「運命共同体」関係を認めている。これが中国のグローバルな戦略展開の基礎となるわけだが、問題は「運命共同体」の内容が不明確なことであり、その承認にあたり二の足を踏む国々が出てくるのも当然である。ASEAN 内でマレーシア、インドネシア、ブルネイ、シンガポール、フィリピン各国は、中国との「運命共同体」関係承認まで達していないものとみられる。ただし、これらの国々に対しても中国は「全面的戦略パートナーシップ」や「全方位協力パートナーシップ」などのタームを用いることによって、緊密な関係を維持することに努めている。ベトナムに対する「同志・兄弟」関係の強調も、「運命共同体」関係構築に向けてベトナムをつなぎ止めておくためのプロセスであったと位置づけることが可能であろう。中国が南アフリカに対して「同志・兄弟」関係を強調

するのも、同様な理由によるものと考えられる。現在のところ、二国間の「運命共同体」は具体性を伴わない言葉だけの問題にとどまっているが、今後どのような形で具体化していくのか注視する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 栗原浩英
2. 発表標題 ジュネーブ会議（1954年）における中ソ越三国の共同行動に関する考察
3. 学会等名 アジア政経学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 栗原浩英
2. 発表標題 中越十年戦争の歴史的位置
3. 学会等名 アジア政経学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 栗原浩英
2. 発表標題 東南アジアにおける国家建設
3. 学会等名 日本国際問題研究所公開シンポジウム「20世紀アジアを振り返る」（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 岩井 美佐紀	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 440
3. 書名 現代ベトナムを知るための63章【第3版】	

1. 著者名 飯田泰之、内田 樹、五十嵐 太郎、上西 充子、栗原浩英ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 自由国民社	5. 総ページ数 352
3. 書名 現代用語の基礎知識 2022	

1. 著者名 五野北野 新太、伊藤 真、今野 晴貴、本間 龍、生島 淳、武進、内田 樹、五十嵐 太郎、上西 充子、辻田 真佐憲、久田 砂鉄、土屋 彰井 郁夫、島園	4. 発行年 2021年
2. 出版社 自由国民社	5. 総ページ数 352
3. 書名 現代用語の基礎知識 2022	

1. 著者名 豊田 知世、瀧田 泰弘、福原 裕二、吉村 慎太郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 花伝社	5. 総ページ数 334
3. 書名 現代アジアと環境問題	

1. 著者名 田中 明彦、川島 真	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 1056
3. 書名 20世紀の東アジア史	

1. 著者名 永原 陽子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 384
3. 書名 人々がつなく世界史	

1. 著者名 桐山 昇、栗原 浩英、根本 敬	4. 発行年 2019年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 402
3. 書名 東南アジアの歴史〔新版〕	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------